



新局玉石童子訓

卷廿一

1279
36



13
1279
36

曲亭翁口授編

玉石童

子訓

第五版

一陽齋豊國画



利田

新局玉石童子訓第五版贅言

〇〇

魏文曹丕嘗いふとある曰文章の経邦の大業也とある経籍史
傳の萬世の裨益あると道而已曹丕の漢賊也渡莫其言の
取るべく其人の悪むべし是よりして下記事小虚實あり時文の
雅俗あり其事実ならざれば傳るる不足らむその文雅るるを見らる
足らむ然れども實事の新奇なるは雅文の俗に通せざるは説傳
奇の由出る所之益裨史物の本れ言たるは浮詭譎議の影を挿
る其甘じと飴蜜の如し是を以て雅客とあり塵俗とあり愛玩して夜を
めて日小續者向是あり但恐らく其閑る者小裨益なりとありけむとも

壹

其書と作る者小あり学問廣博和漢と貫通一萬卷の書と
見破りて奇文大筆雅俗と交え其才四羅貫此奈氏不譲らざる且善
惡順逆と辨明一世態人情と了解しく克蒙味と醒まのり閑る
者覚むるて獎善の域も追る時田夫山妻村童野翁の讀書と嗜
ぶ者其書の醜美を擇ぶ由る唯新しきを愛めも猶書
理義の暗く善悪順逆の詳らざるて宜儒導慾漫の時好小媚
る如た獨学輕才己と知ざる者の短筆小做と所閑る者裨益
を擇取て愛玩あるも具眼の看官とらひつべし或は救世を
らざる者其書の醜美を擇ぶ由る唯新しきを愛めも猶書

肆の得意と或るも合はざる時好小稱ふと媚むの故歎只是
兒戲の冊子なりと巧拙十把一膝小丸弾くと嘲るもあらん好
憎小因所閱せざる是是非を以て而已吾其是と如何せんやと論辨
机をうち鳴せざる怪む盈一鼻梁長くある者五六寸左右の腋小
翼生れり日小之度夜小之度盃水俄頃小火はるり臍小
阿茶と沸まと思へ愕然とて夢覚けりある一老先生の夜話
なほと本集稍稿成る隨小録とての頤を鮮く
弘化三年菊秋霜降前三日亦復婦幼小代書と課て奈長
漬鼠の糟小醉なる本編の作者醉中題す





伊瑣瑣小
力士
去來各從
其師



見越松時八

ミコノマサ
トシノチ

鶴脛奈賀四郎

つるひのなげ
しげ

鬼斬奇三屋染
いふあやむらさき



鐵持隈八刺高

てつもちのりたか



上石立里子詩卷三十一

六三三

新局玉石童子訓第五版自第五十一回至第五十五回總目錄

○卷之二十一 第五十一回

部領河原兄弟與主僕戰 白猪居宅樵二郎夜饌客

○卷之二十二 第五十二回

大江峯張逐說松煙齋 文武和合故人知故人

○卷之二十三 第五十三回

李彦孤忠履歷東西 範的奸惡寬樵二郎

○卷之二十四 第五十四回

辨渾不似防守移宿 小雪太竊名巧資惡

○卷之二十五 第五十五回

鏽箭短刀暗陷樵二郎 兩箇健宗血濺對決場

新局玉石童子訓卷之二十一

東都 曲亭主人授編次

第五十回 部領河原兄弟與主僕戰 白猪の居宅小樵二郎夜客と饌

却説大江杜四郎成勝峯張染六郎通能の部領の御の驟雨を承けて
渡雨去けし勇婦押繪の忠告を思ひけり禍鬼の今宵那裏未起る死
事の情を知らず開と怕るおあねどの外の怨と我らふ心も知りぬ疎人等と争
ふべしものあらぬれ俱那那と立去りて勇婦の教一言の隨意その甲夜の向
新部領の這方の河邊お承おけり船の前岸の岸に在りて船公と呼べし
谷へむいふまはれと思難て一霎時開頭お立程小後方お故死百餘
一叢深は開中お是々とて光り見えけり通能是を見おと成勝不向

和州

ひて必や。那見ぬらぎや草葉隠の光るの螢見ふ似れども今四月の中
 浣るふ彼虫の出へくもあらば何れ歎あらんと訝れ成勝も遠く頭を回
 熟相てらる如く彼光りの宛螢見ふ似れども時猶早のそららぎ。動ち
 されば猜まふ彼草叢の裏あそ朽す株のあるらる夏の夜雨の霽る
 も路傍の朽木のけらる海鰈解の甲さるも光りを發つとあり又怪むふ
 足る者かいと詞いまで詠らむと見まの部領の方よりして這方と扱て
 人許を走り來りける蕉火の光りの爰を回いでも知るは彼韓錦樅二郎
 奈良櫻八重作が外るがう少知りたる大江主僕を媚く思ひて又の怨で
 復えとて弟子約莫八九名と駈催ま追蒐來る各腰の長脇刀
 ちやく棒を扱て路の首草踏用は彼逃まるとの聲も程遠く
 ぎやえけの登時成勝通能の毫も噪ぐ氣色も成勝先譚るまう。

他等ハ必韓錦奈良櫻と歎く疎人等が怨むや死怨を倡て弟
 子さふまを將て咱等と追蒐來つるらん勝ても負ても無益るは
 争ひを好ねとも前面へ渡り船るらん中中で微息まを何をし路を
 開ん準備とせまやといそがせ通能はち點頭て然へ他等ハ又執力を
 高きを出して打散さるる全勝をゆるがらん和君ハ猶あふ在りて近つ
 敵と逆へ咱等ハ固様々ふまよとを成勝うち咄てそを究竟の便
 直之然りとて敵と征まると双りてまぐら何を欲得と見えれば水際植
 たる船棹ありは是上かえと抜合ると通能もも傳て脚踏棋を
 折るふ其棹八九尺あり且さむらり太くねむ合の棒二條とゆる成勝
 其一條の棒を衝立て河邊ふ在り當下通能ハ水際の卵石四五箇を
 擇合つて袂に斂めて残る棒と携へて二十四回後方より小高に處ふ

生茂る雛松の中身を潜しと近づ敵と俟程不散動の尻束ぬる追隊の
衆人直先お找む一箇の辻校是則別人を以て樅二郎の家弟と認る素
良櫻八重作之腰より苛物作る一刃と跨て左にお捍棒右にお蕉火砂
高小振照し小力士毎と從て走り近づく河の邊お杜四郎成勝が單立在
姿を透し見て敵の猴子の那首居り彼逃と罵りて走葉のまくま
程お俟設る通能が丁と打出と投石の牙の一箇の小力士片頬を撲れ吐
嗟と一聲叫びも果て身と翻して叢の彼光りある頭を地响打し付れ
ける卻舎お下る彼朽木の碎けて潑と散乱る頭顱の上お降懸る光り不
驚く追隊の衆人呀ととなりお慌惑ひて走退する程お通能透すの打
おと投石お亦復面三石撲まきと撞と轉輾へいしく蜚散る朽木光り
孰る疑ひ怕まざる死幻術るんと思ひかまきと怯えて立脚もる起る滾

ひら逃走れ八重作も意なき逃る躬方お誘引れて故来一方へ百歩許
引退れ後方お見えの脚を任めて鼓耳高かお衆人然のこ怖るを敵多
繞る兩箇お過ぬ返せくと喚れも早程遠く逃走る小力士毎の耳も被
ぎ返まきもあらざれば八重作のくち腹立好々馮むお足らぬ平人若ら
幾名ありとも何おせいのこらも滅る蕉火投棄て捍棒両お勢悍く
取て還る成勝と撃さんと找めお通能も雛松の蔭より跳出て急持る彼
棒どのと丁々礮と戦ふたる浩り一程お彼隊の頭領韓錦樅二郎の後走
走來る目今第八重作お通能と戦ふと見れも帮助る暇をれお成勝と撃
んとて準備の捍棒斜にお引提て怒罵る聲高く鳥渡人先度の怨と知る
我韓錦樅二郎が一棒を受試よと誓も果さず棒取直と撃さんと找め
成勝も棒めて丁と受流し受駐めり聲耳ゆり立て韓錦とやら疎忽るを



五石首三言卷三十一

九



縦二郎八重作
追ふく
成勝通能と
力戦と

五石首三言卷三十一

九

俺われの和主わぬしと知る人しるしらぬらぬ小怨こをんと受うるるよりよりあららややととのの世よもも果はてて眼まなことと膜まくらとと怨うらみ
るるとののささええやや田文たぶんの洞ほらるるとと食かふふ女めの我われ飽あままでで不ふ懲ちやうんんとと思おもひひ情なさけ由よしありありとと御ご
堂どうふふああららるるゆゆききとと鑑かん一文いちぶんたたもも合あひひせせざざりりとと若わききもも旅りょ客かくありありとともも俺われ名なもも亦また彼か情なさけ
由よしもも人ひとのの噂うわさもも知しららんんとと古ふる文ぶんをを好このむむ慈あわれ悲なげ三さん味あじとと食かふふ女めのの薬くすりとと與あららししめめとと金かね三さん合あひひ
せせとと俺われ鼻はなとと挫くままくく欲ほせせとと怨うらみとと孰たかかららんんとと孰たかかららんんとと早はやくく勝かちちとと決けまませせとと敦とん圀かん
暴あららくく棒ぼう振ふ揚あげげてて睨にらむむとと成な勝りのの時とき々々阿あ容ゆるるる色いろももろろとと并ならぶぶ亦またははららぬぬ怨うらみ
言ことへへ咱われ等らのの故ゆゑ是こゝろ放はな客かくとと今いま日ひ下くだりりととめめととのの地ち方かたとと過あままりりとと和わ郎らうとと知し
ららぬぬ只ただ彼か田文たぶんのの少せう女にょ子しのの世よ稀まれととるるとと孝こう順じゆんとと見み過あままりりとと我われ秘ひ藏かくせせるる藥くすり
とと俱とも小こ真ま愛あとと分わちちてて金かね三さん合あひひ一いつ枚まい取とりりとと媚ねくく思おもひひ不ふ田た舎しゃ見みのの胸むね最さい陝せんにに所ところ為なるる
ららぬぬととののいいふふととばばぬぬ樅ぼう二に郎らうのの怒いかれれるる面おもて色いろ朱しゆとと沃わけけてて暗くらなりり小こ猴こう子し奴ぬ息いき根ね
止とままとと棒ぼう閃せんめめとと敷しきとと透すゐとと成な勝りのの受う流りゅうとと丁ちやう々々とと挑てん争しやうふふ修しゆ練れん精せい

妙めう送そうの本ほん事じ小せう方ほうららぬぬ優ゆうささとと然しかししもも虎こ彪ひやうのの威い力りき小せう空くう西せいくく雲うんももああららりり
てて月つき光ひかりとと光明くわうめいのの水みづ宿しゆくるる影かげ清きよくく四よ下げのの戦せん々々草くさ葉はままでで見みええるる隈かどのの
るるららけけりり介け程ちやうのの通つう能のうのの八はち重じゆう作さくとと棒ぼうとと交まてて戦せんとと七しち十じゆう合あ武ぶ藝ぎ不ふ富ふるる
ああのの杜と校がう小せう八はち重じゆう作さく竟けい敵てきのの棒ぼう持もちたたるるとと反あららししめめたたるるとと刺さ左さのの肩かた尖さとと下した
高たかくく打うちちたたれれぬぬ心こころ慌あわてて遠とほくく帯おびたたるる刀やいばとと引ひ抜ひてて這ことと先せん途ととと戦せんふふるる當あた
下した河か原はらのの両りやう敵てきのの闘たう戦せん蘭らん干かん做しりり程ちやう樅ぼう二に郎らうのの何なに思おもひひにに隙ひまとと覗のぞみみ引ひ外がわ
多おほくく一いつ丈じやうをを退ひかかしてして喘あせとと禁こめめ聲こゑとと被おももたたれれとと旅りょ客かくとと住すままぬぬ俺われ去さのの年とし来き
幾いく名なととるる武ぶ藝ぎとと名なとと賣うるる猛もう者しやとと角かく力りき白はく打う槍しやう棒ぼう敷しき劍けん其その優ゆう
劣りやくとと試しすす和わ殿てんのの如ごとくく見みええるる世よのの英えい雄ゆうとと覚おぼれれとと和わ睦ぼくとと意い衷ちゆうとと盡つ
ええんん等ら等ら等ら等らとと制せいめめとと急いそがが後ご方かたとと見みええるるとと屋やとと八はち重じゆう作さく其その客かく人ひともも由よしりり
技わざ小せう身みとと傷やぶりりとと怒いかれれとと俱とも小せうとと解とけけてて這こ方かたへへ来きははせせいいととあありり和わ睦ぼく々々

と喚よびをけり。然しかれが奈な良ら梯は八はち重じゆう作さくの峯の張ちやう通とう能のう小せう打うち惱なうされて腕うで衰し肩かた三さん疼いたむ。持もつる刃やいばと打うち落おされし。こゝろこゝろの氣きと將まさ大だいく。嘯せう叫けうびて戰いくさ程ほど今いま憶おもひも兄あにいもうと樅はら二に郎らう云いふと喚よびるを。少すく少すくとと蚤い身みと跳とせて苑えんの外のへ退ひきこ。旅りょ客かく彼かとと呼よぶを。和わ殿てんも和わ睦ぼく小せう意いるを。俺おれ豈あらう孫まごくを崇たかへし。といふを通と能のう小せう微み笑わらふを。その勿な論ろんのともか。咱おれ素す素すとと怨うらむを。和わ睦ぼく小せう送そうの車るを。先まその刃やいばとと斂しめしやと。いふまは八はち重じゆう作さく羞はるを。色いろあり急小せう又またとと韃た斂しめして。一いつ禮らいまはれ通能のうもも棒ぼうとと投な棄し礼らいをを復かへして。俱とも小せう汀てい渚しよ小せう赴しよて。通と能のう小せう成せい勝せいの後方の小せう立たて由断たんせもも亦また八はち重じゆう作さくへ樅二に郎らうの後方の近ちかくを。仍なりけ。當た下げ杜と四し郎らう成せい勝せいへ樅二に郎らう小せう向むかひて思おもふを。倍ばいとと和わ殿てんの武藝ぎ一いつ豪ごう傑けつとといふ。下げ然しかるを。猛まう可か和わ睦ぼくせられて。俱とも小せう交かうりを。結むすぶを。至いたらば斂しめし。是こゝ小せう優ゆうき者るを。我われ姓せい名なとと云いふも亦また是こゝるを。一いつ人にんの主僕しよとといふもも叔しよ侄ちるを。峰ほう張ちやう通とう能のう是こゝとと告つぐも亦また通と

能のうもも找たりぬ。對たい面めんもも樅はら二に郎らう是こゝとと見みて。和わ君きんもも年ねん尚しやう二に十じゆう小せう足あらず。見みるを風ふう流りゆう士しの似けもるを。武ぶ藝ぎ不ふ富ふるを。のを。相あ親しんの京様やう。言げん語ご應おう對たい。君きん子しの風あり。咱胞ほう兄けい弟ていの武骨こつる。田舎せ兄けいの類小せうあらず。然然しかるを。猶なほ思おもひを。不ふ不ふ喘ぜんりて。圖ず數ず小せう做しよますととあらば。後悔かい何なにをを及およぶを。死し然しかるを。因よ怨えん地ちとと見みて。其罪ざいもも饒にほされし。一いつ期きの幸とといふ。八はち重じゆう作さくもも這こ里こゝへ。陪話はい言げん小せう。とといふ。廿に六じゆう八はち重じゆう作さくへ阿とと答こたへて。中ちゆうとといふ。而しか王わう僕ぼく小せう斂しめしとと演えんて。今今いま刀たう袷あしの幻術じゆつあり。依嚮いの陰火えんとと散さんされて。我われ黨たうの勢力りきとと折せられ。いふ。是こゝるを。躬こう方は奴な們ら驚おどろこひて。逃に走そうりたるを。故ゆゑ小せう和わ睦ぼく小せう早そう斂しめし。心こゝろ生なるを。樹じゆをを。不ふとと向むかふを。通と能のう小せう笑わらひて。否いなとと。彼か最さいの裏小せうあらけ。朽木この所為ところ。其その故ゆゑ箇こ様やうとと有あるを。儘ま小せう説せつ示しせば。八はち重じゆう作さくの呆るを。ままとと。又またいふ。樅はら二に郎らう是こゝとといふ。受うて。感嘆かんたんあらず。且且かついふ。世よの常言じやう小せう疑ぎ心こゝろ暗あん鬼きとと生なるを。

五石童子訓卷二十一

四

文溪堂主編

我弟子等の日屬不似けき朽木の光り胸を洗して逃亡なるも一奇なる意
ふ不開る刀袷們を守らせぬ神明佛陀の冥助ふこそありつらめ然らむ各
腕と扱く我弟子等のいふして余をりりる小怖んやそれ成就ても刀袷們
入るらぬと知る不足れり八重作の八思ひをやといふ八重作然ると應へる俱小嘆
唱あつらふと成勝急不推禁めて過分の夜衣美の當りがらる我意ふ和殿
胞兄弟の武勇勝るのさるる理義中の闇かろざる余を心生るれば田文る
る孝女と慈父を飽までむむせらるるあつらふがてといれて椪二郎嘆嘆ふ
堪も開る種々の情由あれども一朝の説盡かろるいそ爰より杖を返して
藏屋不明いぬ夜との夜と共小意衷と盡さん卒あへといふとらる忽地部領
の方よりして置々と噪く一箇逃る小力士等がふあく棒と携へる齊一
かへ来る椪二郎是を見えり又奴們が懲むま小聞諍果くの棒

三昧今さら集ふ無益八重作の疾ゆれて和睦のよりと告知らして各
宿所へかへ遣り後又蝨く立ねといふを八重作の谷も果ど身と起し
葛地小走りぬる如く此々々と和睦のよりと報ふけん散動の軌て鎮りてうち
笑ふ聲安えけり介程大江王僕韓錦弟兄の最懇切に誘引を不
いんはまきとて且致び且謝してうち連立てゆく程一町あまう那方小力士
毎が棒と伏て左右二仍小羅列れり相迎へて俱いひや師家御向ふ不覺の
掙れ面目もろくはれりも和睦整ひてかろる芽出さぬのさる客入達
も鏡いぬねいりてくと諸聲小勸解を椪二郎推禁めり開らるるなり
若們の宿所ふかりて明日又来とて中見越松と鶴脛に我宿所ふかりて
事の由と押繪ふ告て餐應の準備させよ夜分猛可のとるれ酒菜の
豆腐のよと好あろなる疾走れくと追立れば件の両箇の小力士

玉五童子川卷三十一
十二

応をまづ身を起して。部領を投てきおぼせ。然れども餘の小力士をいり。終主客の後方お立ち。せむこといまま。遠くらむ。左右お岐路ある處。拵二葉。兄大江主僕お告別ある各々。宿所へとも退りける。是より後。主客両方。相譚なり。韓錦が白猪の宿所。押繪の彼両箇の小力士。答を報る。飲。び胸の安堵。て然いとて。恥。他も。も。傳。せ。つ。又。饌。の。儲。も。中。の。あ。る。れ。何せん。も。東西。足らぬ。酒湯。あ。る。客房。お燭。臺。お。く。俟。程。お。拵。二。郎。と。八。重。作。り。大江。主。僕。お。案内。と。ま。り。か。る。あ。お。ける。足。响。お。見。越。松。時。八。と。鶴。野。奈。我。四。郎。お。走。出。片。折。戸。と。早。く。用。ひ。て。迎。れ。成。勝。と。通。能。の。禮。を。回。り。主人。お。引。り。て。客。房。お。赴。け。送。の。辭。讓。お。口。誼。果。て。寶。註。の。席。定。る。程。お。押。繪。の。い。そ。く。四。箇。の。茶。碗。お。汲。合。る。煎。茶。と。盆。お。乗。し。て。の。り。出。て。薦。め。る。を。登。時。成。勝。通。能。の。恭。く。押。繪。お。向。ひ。て。御。高。お。不。慮。の。驟。雨。を。一。霎。時。檐。下。と。

苟且まづ。言の重心の鉄びと。演ると。押繪の。あ。ま。い。ま。應。と。ま。り。遠。く。お。ま。り。庵。通。退。り。と。大江。主。僕。お。目。送。り。て。主人。弟。兄。お。告。げ。お。ま。り。御。高。お。如。比。々。の。ゆ。ふ。よ。の。料。ら。ま。も。令。妹。の。言。力。お。駭。嘆。あ。る。今。戦。國。の。世。と。も。婦。女。子。お。あ。似。は。る。死。ま。で。お。凖。心。し。く。ま。の。い。れ。と。拵。二。郎。お。果。ま。否。我。們。胞。兄。弟。女。弟。さ。へ。此。の。筋。力。お。あ。ら。ね。と。女子。の。言。力。お。鄙。語。お。只。是。貨。財。の。持。府。官。ま。ま。施。ま。所。あ。る。く。も。あ。ら。ぬ。漫。小。人。お。あ。ら。せ。と。豫。敬。言。め。ひ。お。ま。り。お。た。り。見。鈍。ま。り。と。と。と。程。お。時。八。と。奈。我。四。郎。の。酒。盃。鈍。子。美。美。の。椀。と。廣。蓋。お。ら。ち。載。て。の。り。出。て。主。客。お。配。り。る。ま。ま。の。餘。の。酒。菜。の。廿。路。省。の。外。ゆ。る。物。も。ま。り。け。の。當。下。主。客。の。口。誼。あ。り。拵。二。郎。お。笑。い。は。大江。主。僕。張。主。今。より。と。莫。逆。の。交。り。と。結。ぶ。べ。死。真。の。中。直。り。ま。り。俗。禮。お。ま。り。從。ふ。べ。け。れ。の。を。を。饒。一。ぬ。ね。と。ら。ひ。四。箇。の。盃。を。分。ち。て。兩。箇。お。大江。主。僕。へ。兩。箇。お。其。身。と。八。重。

作の前まへ置あせて比ひ皆みな共とも侶り小こ受うけ酒さけと喫く乾かんして投なげて投なげて和わ睦ぼくの盃さかづきを
分わちて辭ことばとさるさるる苦く樂らくと俱とも小こままべべとと推おし言ご訖しれれ時とき八はちも奈な我が四し郎らうも俱とも小
祝いわ言ごも是これよの後のち主あつち人う弟あ兄にりま又また不ま盃まを改あらめり大おほ江え王を僕わが小こ萬まるるものら成なり
勝かちも通とほ能のうも然しかるる酒さけと曉あやねね樵せう二に郎らうの時とき八はちををりり押おし繪え小こ告つてて父ちち膳ぜんと急いそ
ぐぐままくく時ときと程ほどささと早はやめて出いでで夕ゆふ飯い海うみ多た御ごの多た料りょう理りの只ただ時ときの間まと合あ物もの
炙あぶ鶏とり卵たまご小こ乾かん魚いの西にし三さん種しゆ合あ添そへへ茶ちや淘たうの碗わんの錦にしんも色いろ細こまくく款くわん待たい小
成なり勝かちと通とほ能のうの飲のひひと演えん著しやくと抗あてて俱とも小こ夜や飯いと過すを程ほど小こ押おし繪えの二にととびびぬぬ
ああてて今いま宵よの疎そ畧りやくと陪ばい話わるとささるる屢しばしば飯いと装ま添そへへ最さい町ちやう寧ねい小こ款くわん待たいを程ほど
樵せう二に郎らうと八はち重じゆう作さくの件けんの西にし箇かんの小こ力りき士しも酒さけ盃さかづきを取とりり醉すいを盡つくして小こ夜やの更さら
るると知しららぬぬけけ既すで小こと成なり勝かち通とほ能のうの主あつち人う弟あ兄にりま小こ押おし繪え曾そ小こ御ご食じき應おうの飲のひひと演えん
酒さけ盃さかづきと辭ことばひひ小こ樵せう二に郎らうも強あ難たがてて件けんの西にし箇かんの小こ力りき士しも盃さかづき盤ばんを飲のめめとせせと亦また

只ただ前まへ茶ちやといいととのの時とき八はちと奈な我が四し郎らうの共とも小こ庵あん漏ろうへ退たいりりか成なり勝かちと折せりを
ゆゆ小こ樵せう二に郎らう小こ譚たんとささるる喃なん韓かん錦しん主しゆう深しん夜やの長ちやう譚たん無む心しん小こ似にれれと今いまははら
ららちも置あかかたた田でん文ぶんの孝かう女によ父ふ女によののんんゆゆ小こ和わ殿でんのの人ひとの為ため小こ彼か少せう女によと媒まめめと
妾めかけ小こ做しれれとのの目めと父ちち女によの反へんててらら腹はら立たてて従したがふふもああららざざれれ和わ殿でんも亦また怒いかふ
の堪たむむ當あた所ところ小こ旅りゆう宿しゆくと饒じゆうされれねね口くち得とく宿しゆく所ところを立た去さるるより又また一いつ伙くわの疎そ人にんを
追お敷しせせららまま盤ばん纏ちんも小こ奪だつ畧りやくも小こ一いつああららむむとのの通とほ能のうも俱とも小こ田でん文ぶんの
然しかれればばとと女によの親おやの兩りゆう眼がん片ぺん脚きゃくを傷やぶららまま廢す人にんももりりののままらら田でん文ぶんの
洞どう小こ露ろ宿しゆくして袖そでと難がたてて饒じゆうふふ迫せまると和わ殿でんの猶なほ飽あむむとありりけけ御ご堂だうとと儀ぎと
錢ぜにもも米こめもも施しとと饒じゆうふふ一いつののいいふふとと詰つると成なり勝かち推おし禁きんめめと意い小こ人にん
性しやうの善ぜんるる小こ孰あれれと哀あれれと知しららぬぬとと况ま況ま使し氣きああららんん者もの弱じやくを助たすけけるる心こころもも已いまにに隨したが
意いせせらられれとと然しかららぬぬとと疑うふふとと從したがふふとと今いまもも然しかららぬぬとと

解て彼等父女と憐愍の交遊の爲に甲斐あり。其の思ひぬむを左
右齊一諫言六椀二郎の嗟嘆不堪と踏然とと答る。教諭其理
也。とも思ひぬむあらねども始よりと彼父女の爲に謀りて聽れねば及て怨寛
とありまを飽ませ懲りて後ある彼等先非と悔もせると思慮し我失
錯と今稍知る遅る幸ふも交遊の諫言耳小串の腸小入て既昨
非を知る上肝胆と吐意衷と盡して詳小せざるべし言言とも少の我
父の築石の人氏間貫佐用六故世とえ喚れる原是南朝の餘類る三世相
恩の主君お仕へく左も右もくものける昔小異なる世のなき小幸り
のこヨウりけん我身弟兄推し時潛ふ故御を立きて。京小一松浪華小三
松橋居を後小竟小這地流まら敷る劍白打と人小教て年来と歴ぬる
程小退途人小名と知られて富小あらねと貧もあらねと三食餘あけるも只

一炊の夢と覺て二親を身故りしより又五稔の春秋と麻止る我身不
肖小あられも十八九歳の始より親の家業と美嗣て敷る劍白打角觥
まを這頭の御の社校を小師と仰まき己が自決心へハ聽れり用いらる。
然ればと悪事と做さ善小與くと人の爲小骨を折らむと公とさけれ或ハ
借財の債夫婦の口舌親子の不和何れと多く人の爲小憑もまき説和
るを身の務と做せるも。只年の秋毎小弟子もと相俱くと鎌倉小赴て
鶴岡の社頭を角觥と與りまらるの外ハさる生活るたのら親の時
購求り。田圃あまが饑もせど因と綽號と韓錦椀二郎と喚做さるハ
只是角觥の上小の我身小原の姓名あり。間貫佐用二郎茂洋是より
又是る八重作ハ原名佐之七次せるとも。都て這頭の里人ハ椀二郎重
作と喚ぶ。その美を知らる幾稀り。余も今年春二月の時候本

ぐんぬりかぶらのぐんぬりのまこと。あるひこれのまこと。情地不譚ひのまこと。
 郡の主鑄野郡司の範的大人有一我樵二郎と招れよきて。情地不譚ひのまこと。
 屬日某の客店。豆田もる。一箇の旅客あり。その女児は這頭不稀る。
 花をけりて告る者あり。是れは。咱も潜りあはせり。井といふ。小間窺
 あり。窺れ。まこと。野の花の及て目小美く。村酒の人を。酔あひ。趣あり。
 知らる。如く我青年二十の上と。三四過給。曩小妻と娶り。か。産後
 母さ子さ亡く。今尚獨居され。い。彼旅宿の少女と。妾小せ。欲。給
 銀支度料。何なる。厭から。然れば。我威勢。と。死
 る。情地不和郎と憑む。有右と。才。成。と。人。
 我も思へ。任用せん。せ。か。倘。の。敷。孰。和郎と使者といえ。
 あり。然。と。真實。牽。物。と。酒。盃。を。薦。め。ら。し。暗。譚。細。や。り。
 け。已。肚。裏。思。ふ。領。主。の。所。望。情。慾。と。然。る。媒。妁。我。本。意。も。ら。

ぐんぬりかぶらのぐんぬりのまこと。あるひこれのまこと。情地不譚ひのまこと。
 郡の主鑄野郡司の範的大人有一我樵二郎と招れよきて。情地不譚ひのまこと。
 屬日某の客店。豆田もる。一箇の旅客あり。その女児は這頭不稀る。
 花をけりて告る者あり。是れは。咱も潜りあはせり。井といふ。小間窺
 あり。窺れ。まこと。野の花の及て目小美く。村酒の人を。酔あひ。趣あり。
 知らる。如く我青年二十の上と。三四過給。曩小妻と娶り。か。産後
 母さ子さ亡く。今尚獨居され。い。彼旅宿の少女と。妾小せ。欲。給
 銀支度料。何なる。厭から。然れば。我威勢。と。死
 る。情地不和郎と憑む。有右と。才。成。と。人。
 我も思へ。任用せん。せ。か。倘。の。敷。孰。和郎と使者といえ。
 あり。然。と。真實。牽。物。と。酒。盃。を。薦。め。ら。し。暗。譚。細。や。り。
 け。已。肚。裏。思。ふ。領。主。の。所。望。情。慾。と。然。る。媒。妁。我。本。意。も。ら。

其言懇懇うけれ困と再度の尋思不及む應まると其醒て
 退りて宿所へかゝるて件の事の趣を八重作に告て意見と問ふ八重作も亦
 その更を飲ぶあられも領主の微黙止がけん先その父女よりと告く誘
 へて人の心はく意決して次の日件の旅宿へ赴て少女の父某甲の
 来意を告て對面する領主所望の一條を悄やく説示して少女の爲給
 事と只管小勸めかとも父女を受引氣色も然る美の望半からむとの谷
 へて執も合さるゝ猶懲まふ日と累ね歩を運びて幾回とく媒妁せまく
 欲したる果は口舌の風濤起りて少女の親の怒おの堪む我身と酷く罵りて
 非禮不遜の言を我も亦怒お任を擧げ懲さす思ひかとも敵もる
 孤獨の旅客も亦巻の中人の大人氣を思ひ復して逆旅主人を權し
 促して件の父女と立去して逗留と許さず然れども彼旅客の強情あり

悔もせむは這里の宿るうらやと咄はるる女兒と俱して田文のかへ出で
 宿所を去て遠くもわらの乾浄なる地方まで五人も跟らむと打擲せられ
 のころぞ行李も盤纏も喪ひおれと其頭の人の皆のありのまじり知りぬ
 業自得といひべし。それどもおのれ行李と盤纏と実喪ひいふん我を疑
 ふ者もわらん我旅弟子と首を這一御の社儀も集合と虚実と糾さむと
 答てその次の日弟子もわらん御堂送もる招はるる穿靴奪りし小
 然る正元吉とある者一人もあつてと各俱し神水と啜りて齊一誓ひ
 去かば後安ん似れども我本意ならぬ媒妁して見る影もなれ旅客の言辱
 られて後と取し是を絶てるは所今よりの後御堂我を侮る者もわらん

玉石童子言卷二

七

文彦堂

いふふまゝだと思難て腹立くそ在り一程。又弟子等の告るを聞き不彼旅寮
 又人等自ら脚を傷れて艾術やまらば女児と俱ふ田文を渡同宿宿し
 往還の人袖をきき我も見たり彼もなるといふ者日毎言りければ我復肚
 裏小思ふやゆゑか如たの件の父女がまゝ困窮至極せり竟志を改て人を
 頼て我を勸解らん我言品だは達らるるその折小を錢を衣を施し
 資あるらん他等が饑ると俟らば而已と尋思とまゝの御方。老幼男女と
 箴めて孰もあれ田文の洞を食父女を鏝を文でも施す者我慈寛と弟
 子等とていせりか人愈怕れて違ふ者有右二十日たう麻生る程の御向
 我居る里の酒肆の八重作が尋末を申すもの如此と告知りて且は
 件の両箇の青年児の旅客と認めれ雨衣の外持る物も意ふ彼奴等ハ
 隣郡る。御方の見子と認められ開る左も右もあれ大哥と酷く罵りて強

盗ふも似るべしといひて知らぬ貌して微もゆるせざるる何ぞの
 俠者といわれ疾走とよそが折ら我と共侶の酒喫居る余我四郎時
 八以下の弟子等おぼれよの朽惜けれ我勃然と怒不堪むとら安らぬる
 衆皆立ねと身と起して走出ける短慮の本性其酒肆より程遠くぬ時公
 宿所不立よりて身固ある皆共侶不揮棒蕉火引提々出くも怨寛の往
 方と知らね四下の里人小問試る不武士とあり死両箇の青年児ら連立て
 黄昏時候小新部領の方小貴と正可報る者あれ然らばいそげと程小
 よと早くも傳聞て後走る小力士と甲乙共十餘名彼河原まで追蒐し小
 奇異朽木の光明法を小力士毎に憑足らる我兄弟兩賢兄と創て
 棒を交へ復た敵屋に光臨あら料らるる幸るれとも只彼田文の洞を
 父女と執念深も苦ゆら皆是已が僻事飲僻事る飲非と飾る似て面



玉石童子言巻下

うたな

正しくもるたところ。のまの孰飲理非と判ん愚意の事の始より彼旅客客父あ
 為ふたれと謀らねども事の成らざるのまを竟見雙言敵の思ひと做せるの
 実小己とゆざるの所以とのを察しぬねと啣言がす長談脩話不
 心の同公重作も俱小嘆息あちける當下成勝通能の列々と果て成勝先
 答る事今とゆて知る主人の任使善悪俱小準定する言と易くと思はる
 勇ある小似されども咱多々思ふより多らる最憚る言るが且試ふ打出さん
 歎とゆと擬二郎少あ金開る度幾の所人既小交遊の美と結れ小何多の外
 立思あさやうで教を美ま欲さいうてと請向へ成勝へ備る扇を颯と推
 開れて是これを見ぬのね扇小蟹目の總括あり人小一心の主神あり人各志る
 此とゆむ古語のりりや志士の講聲小縊るを忘れも勇士の其元と喪ふと
 と心れど語ハ老列の二書及孟子子やも見えり宜る哉匹夫も志を大奪ふべう

らど意小田文の旅客の廉士る孝也假令千金の利をり誘ふとも豈阿
 容阿容と人の為小妾ゆる者ならんや然ると和殿のよも思つて勇ある脅力
 あり小乗しく威勢たとりて通りし抑怒小あらるやとゆ傍と見えれば通
 能も俱小ゆる彼父女の病命る宿所を逐まるとの暝昏小多人も小持
 悩されて盤纏の金と喪ひし和殿の所為小あらるとと起原和殿より
 出さる春秋左氏傳と按る小晋の童狐が筆と添て趙盾君と執せりと書
 夫小似るべ然ると和殿の猶悟ら彼父女を饑る小及びて其志と改め
 従ん秋とて俟れり已と知りて人を知らる淺慮とのん無礼れども犯し諫て
 用ひらまざる袖と拂て去んのみ只彼父女小負小あらむ理とゆひ右の如し
 辱も思ひと思ひいと論其成勝然と應て峯張の意見も愚意も
 去人小俠者と仰せ世情小貫通とらん和殿小向ひて云云と博士態る諫

言の鄙語の釋如説經孔子の語道の類るれども。文道の為の一言之信を盡して
 裨益あらば自他の幸甚し。からん意ふ領主の懇望は只是色と好む過終を和
 殿も承る恩ありとも。別報恩のわあ。先度の媒成成就せよとも。彼か
 背ふあらね願ふ。田文の志士孝女と和睦して。彼困窮と憐愍て。邦中助ふも
 做らぬ。先非と補ふ。是第一の捷徑。何わ恥る。あらん然れば。孔聖の教も
 過て改る。小憚る。勿れ。の惑ひを覚。ぬねと。理り切。する主僕。の金言
 備せ。まる八重作。ま。背ふ汗を流。ま。骨小徹。膽小銘。下。後悔。臍を咬
 る。況その兄。縦二郎。夜醺の酒と。共侶。無明の酔。ま。頓小醒。昨日の
 我を恨。る。ま。頭と。低。ま。又。黙。然。と。眠。る。が。如。く。時。の。移。る。と。知。ら。り
 けり。あの段。の。ま。盡。さ。ね。ども。又。卷。を。更。ゆ。く。且。下。回。小。解。分。ると。聽。ね。が。

新局玉石童子訓卷之三十一終

(村田)

